

# 平成27年度 第8回講演会 記録

|     |                                        |
|-----|----------------------------------------|
| 日 時 | 平成27年7月25日(土) 13:00~16:00              |
| 会 場 | 此花会館 梅香殿 3F 大ホール                       |
| 講 師 | 森林総合研究所研究室長 堀野 眞一                      |
| 演 題 | シカと日本の森                                |
| 備 考 | 参加者数 153名 (JR 東海道線の人身事故の影響あり) 記録 中垣 尚治 |

一貫して野生ニホンジカの管理についての仕事に従事して来られた第一人者の講義に、大きな期待が寄せられた。シカの被害状況・シカの生態・シカの歴史などを説きながら、被害対策についても語られた。

研究者としての対応策は明快なものをお持ちのようであるが、現実的にはいろんな面での制約があるようだ。

- 1) シカの被害としては、農業・林業は直接的であるが、環境・植生などへの被害が将来は壊滅的な影響を及ぼしそうであることが懸念される。多くの森林・高山・希少植物などが荒地になって環境破壊が心配される。林業被害のデータは下記に示されるが、ノネズミ・ノウサギ・カモシカの被害は減少しているが、シカの被害は増加傾向にある。
- 2) シカの生態についてカモシカとの比較で説明された。初産齢が低く、連年出産し、群れで生活するので繁殖力が非常に高く(年間2割増える)、生息密度が高くなり、多くの食物を集中的に消費する。また適応力が高いので、低地から高地まで生活できる。
- 3) 歴史的に見て、古くは江戸時代にも多くのシカが生息していたという記録があり、東北地方の事例で説明された。「巻狩り」と称し、四方から囲んで獣を獲るという大規模な狩猟が行なわれ、一日で数千頭のシカを獲ったという記述が各地で見受けられる。軍事訓練の目的が強いが、肉や皮の取得も目的とした。こうして一旦減少した生息数が、現在回復してきているというのが妥当である。
- 4) 対策として、現在生息が確認され被害を受けている地域は電気柵や適正な狩猟しかないが、まだ被害の少ない地域では予防的対策が必要である。一例として、分布調査をし、季節性調査・移動路調査などを経て、越冬地を突き止め捕獲するという対策である。しかし具体的な対策に乏しい。

この問題の大きな障害は、\*適正生息数を保つことに対する動物愛護心との葛藤、\*行政間の意思統一の不徹底、\*マスコミを含めた国民的関心の未熟性が大きいと思われる。しかし最近になって被害状況が著しくなり、行政が中心になって対応策を講じるようになった府県が現れてきた。「ジビエ料理(注)」に取り組んでいる府県があるが、全国的にはまだ我が地は大丈夫との意識が強いようであるが、手遅れにならないければよいかと心配される。

(注)「ジビエ」とは、狩猟で得た天然の野生鳥獣の肉を表すフランス語。秋の「芦生観察会」では、ジビエ料理を頂く計画をしていますので、多数の参加をお待ちしています。

